

日中連携による実践型のデザイン教育展開の可能性

著者名(日)	磯村 克郎, 迫 秀樹, 佐井 国夫, 黒田 宏治
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	13
ページ	143-147
発行年	2013-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000651/

日中連携による実践型のデザイン教育展開の可能性

Possibility of deploying a practical design education through cooperation between Japan and China

磯村 克郎

デザイン学部生産造形学科

Katsuro ISOMURA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

迫 秀樹

デザイン学部生産造形学科

Hideki SAKO

Department of Industrial Design, Faculty of Design

佐井 国夫

文化政策学部国際文化学科

Kunio SAI

Department of Industrial Design, Faculty of Design

黒田 宏治

デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

2012年3月に上海市を訪ね、二つの大学と一つのデザイン事務所のヒアリングと現地調査を行い、大学発の日中連携による実践型の製品デザイン教育展開の可能性を探った。それぞれの訪問先で産学連携や実践的教育のしくみや場が工夫されており、日中の連携を導入する契機もいくつか確認された。ここでは、その調査報告と今後の展開に向けた提言を行うこととする。

Visit the city of Shanghai in March 2011, we conducted a field survey and interviews with two universities and one design firm. We explored the possibility of deploying a practical product design education through cooperation between Japan and China from university there. Mechanism and field of education and practical business-academia collaboration has been devised in their visited, it was confirmed some opportunity to introduce the cooperation of Japan and China. Conduct its investigation report, in this paper, we make recommendations towards future development.

1. はじめに

2012年3月に、上海市にて大学のデザイン系学科とデザイン事務所へのヒアリングと現地調査を行う機会を持った。中国の大学のデザイン教育に関しては、黒田、佐井による「中国の大学教育におけるデザイン教育の動向(その1)」 「中国・海南省における大学デザイン教育の現状 - 中国の大学教育におけるデザイン教育の動向(その2)」が、それぞれ2008年と2010年に、静岡文化芸術大学研究紀要VOL.9及びVOL.11にて報告されており、本研究もその延長線上に位置づけられる。また、中国の大手電

機メーカーのハイアール社との交流訪問において、日中教育研究連携の可能性が言及された経緯(黒田、佐井、磯村、迫、伊坂、木下「日中連携型デザインビジネスの生成と展開 - 青島海高設計製造公司(QHG)の設立・運営をめぐる」静岡文化芸術大学研究紀要VOL.12, 2011)も鑑み、2つの大学、並びにハイアール社と連携しているデザイン事務所を訪問先とした。

今回訪問した相手先は次の通りである。

- ・上海工程技术大学 高科学技术園
- ・复旦大学 上海视觉艺术学院
- ・上海芸凯设计有限公司(GK 上海)



写真.1 上海工程技术大学周辺の街並



写真.2 上海工程技术大学にて
佐井教授の師・劉教授(中央)と左は馬教授

前述の研究では、中国のデザイン教育の動向や実務の現場を概観し、変化が急な状況やカリキュラムの特色、産学連会の可能性等を把握することができた。今回の研究では、そのような状況を前提として、日中連携によるデザイン教育の可能性を探ることとした。それぞれの現場で、交流や教育の起点に活用可能な活動状況や組織を抽出し、現状調査や関係者へのヒアリングを行った。

交流や教育の起点として、ここでは教育と実務の連携の視点に焦点を当てた。デザイン教育においては、実務的要因の重要性が高いこと、摩擦の面がクローズアップされがちな両国の産業要因において交流という切り口を見いだせないかということ、筆者らによる実務や産学連携プロジェクトの実績を活用できるのではないかということ、等の理由からである。

将来的には、日中の学生による日中産学連携デザインワークショップ、相手国デザイン現場へのインターンシップ、それらの成果発表の場としてのギャラリー活用と相互訪問等が考えられる。

2. 現状調査

2012年3月26日に上海工程技术大学と复旦大学、3月27日に上海芸凱設計有限公司（GK 上海）を訪問し、現地視察とヒアリングを行った。

2-1. 上海工程技术大学

上海工程技术大学では、高科学技術園という大学敷地内にあるデザイン企業誘致および産学連携の施設等を訪問した。そして、その責任者である馬教授と自らのデザイン事務所を入居させている劉教授にお話を伺った。（劉教授は、上海市からCI、VI、パッケージデザイン分野の大師としてオーソライズされており、本学佐井教授の上海勤務時代の元上司でもある。写真.2 参照）

高科学技術園は、大学と企業が連携して国際的なデザインの基地として、また実戦的な学生人材育成の場として、大学敷地内の建物を改装して企業を誘致している施設である。デザイン各分野や工学系のオフィスが一般より安い賃料で入居できるようになっている。

劉教授のデザイン事務所は、劉維亞大師工作室といい、



写真.3 学内に誘致された劉教授のデザイン事務所

CI、VI、パッケージデザインを中心とした業務を行っている（写真.3）。施設内に400㎡のオフィスフロアをもうけて、デザイン事務所としてのフロアゾーニングを行っている。

フロア中央に、個人ブースのワークデスクをレイアウトし、周囲にミーティングスペース、重役個室、事務室、印刷室、応接室、サンプル・資料室を配置した典型的な開発・デザイン業務型オフィスである。受付の外側にはプレゼンテーションルームとともに、学生の作業ルームがセットされており、大学との連携をとった実務業務が可能な構成となっている（写真.4）。学生作業ルームを受け付けの外側に配置することで、参加性と実務のセキュリティをコントロールしているものと推察される。

所員は20名程度勤務しているということであるが、上述のような学生作業ルームを機能させた学生参加型のデザインオフィスである。参加学生は、大学院修士やOBが半年間、約8人程度業務に参加するとのことである。

劉教授は、ここでは実務家として実務による学生のデザイン教育への貢献をすることで、ローコストなデザインオフィスを運営している。一方で、別の建物内には、彼の研究室もあり、大学での教育・研究者としての拠点となっている。劉教授は、実務型デザイン教員として、教育と実務を効果的に回転させ、大学も彼の環境を整えることで、学生の参加性や教育効果を高めているのである。

2-2. 复旦大学

复旦大学は、中国を代表する文理科総合大学であるが、文化芸術の大学設立の流れに乗り、2004年に準備委員会を設置した後、2005年に上海視覚芸術学院を設立した。当初300人程度だった学生が2012年では、約3700人になっているということである（写真.5）。

ヒアリングは、学院長の張同教授、陳講師（陳講師は、武蔵野美術大学への留学経験と、次の訪問先の上海芸凱設計有限公司（GK 上海）での勤務経験がある。）、張少俊教授（張少俊教授は、多摩美術大学への留学経験がある。）に対して行った（写真.6）。

学院の設立経緯は前述の通りであるが、学院はデザイン学院、美術学院、パフォーマンス学院、ニューメディア学院、ファッション学院、文化産業学院に大別される。さらにデザイン学院は、視覚伝達、広告、パッケージ、ディス

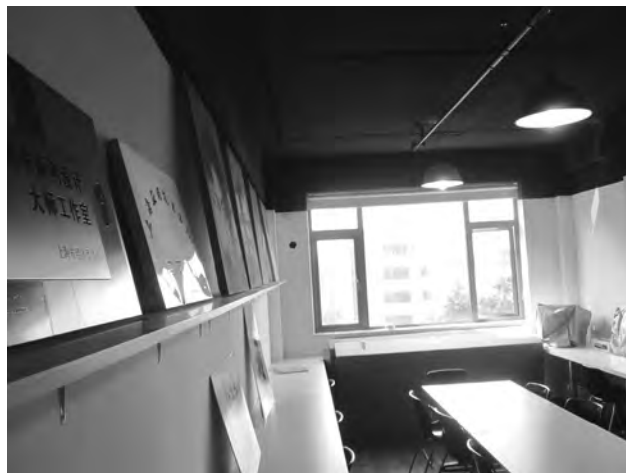


写真.4 デザイン事務所に隣接する学生作業ルーム

プレイ、インテリア、プロダクトの各デザイン分野があり、実践型の教育が指向されている。

教育上の特色として、専任教員に加え、社会人講師として実績がある著名なデザイナーを招聘することが挙げられる。この社会人特別講師は、スタジオ付きの待遇が与えられ、実践的な教育の場となっているようである。日本からも、黒川雅之氏や中西元男氏が客員教授として招聘されている。他に、アウディのデザイナーや上海万博にかかわったデザイナーなども挙げられた。

企業との連携は盛んなようで、上海の企業 50 社程度とインターンシップ形式で交流を持っているとのことである。キャノン（中国）もインターンシップ受け入れをしているようである。

学生の就職率は、口頭で 98% ということであるが、陳講師からの内情のヒアリングでは、必ずしもデザイン関係への就職とは限らないようである。また、近年のデザイン系学院とデザイン系学生の増加による飽和感は、企業からも国家教育部からも指摘されているようであり、これは、前述の黒田、佐井による調査結果とも整合性がある。

大学の施設は、広大な敷地に短期間で建設されたそうであるが、現在の 3700 人の学生数に対して、25000 人分の延べ床面積は確保されているということである。教員の研究室棟の廊下には、学生の課題成果が展示されていた。当日はグラフィックス系の課題のようであったが、基礎的なタイポグラフィからその展開に至るプロセスが何え、割合オーソドックスなプレゼンテーションだったように思われる（写真 .7）。

最後に、課題作品や産学協同の活動などの展示をおこなうギャラリースペースに案内された（写真 .8）。ここは、キャノンとアップルがスポンサーとなっている施設で、吹き抜け中二階に両社の展示がある。一階のフロアは企画展示スペースになっており、当日は大学と企業との産学連携のワークショップの成果が展示されていた。周辺には、学生の課題作品やプレゼンテーションコーナー、喫茶機能があるカウンターやテーブル等が配置されている。

この他にも、上海市中に 1933 年の建築を改装して、ギャラリー・研究室・バーを複合した M30 という施設（約 1200 ㎡）を持ち、社会や都心への接点としているようである。



写真 .5 広大な敷地の復旦大学

これらは、復旦大学上海視覚芸術学院が目指す、実践的教育や企業とのコラボレーションを実現し、それを表現する施設であり、学内の教育と連動させることで当大学のデザイン教育の成果を高めようとするものであろう。

上述の大学内のギャラリースペースで見学後、喫茶カウンターからのコーヒーをいただきながらヒアリングする中で、先方教員から「アジア」等のテーマで本学との協同テーマ交流展を開き、学生も相互交流するような企画の打診も受けた。日本への留学希望の学生も同席しており、学生の留学希望先の 1/3 は日本であるという。ここはまさに、デザイン交流を発生させる施設であったといえよう（写真 .9）。

2-3. 上海芸凱設計有限公司（GK 上海）

上海芸凱設計有限公司（GK 上海、以下 GK 上海と記述）は、日本の栄久庵憲司率いる GK デザイングループと中国のハイアール社との合併による本格的総合デザインオフィスである。上海中心部のオフィスビルに 20 数名の事務所を構えている。

ここでは、在中 10 年のオフィスマネージャー橋本氏と当社デザイナーで 2-2. の復旦大学上海視覚芸術学院にてプロダクトデザインの非常勤講師でもある徐氏にヒアリングを行った（写真 .10）。

GK 上海は、インダストリアルデザイン、商品企画、調査計画、グラフィックデザイン（CI 計画、パッケージデザイン、環境サイン）、都市環境設計を主要業務としている。口頭のデータではあるが、業務のうちプロダクトデザインは約 50%、グラフィックデザイン系はサインデザインの成果が多く、都市環境設計では日本のグループ会社の GK 設計とタイアップし、コンセプトを受けて実施デザインを行うケースが多いようだ。

プロダクトデザインではハイアール社とのプロジェクト、グラフィック系の上海万博サイン計画、都市環境系での地方ディベロッパーとの開発などの実績はあるが、デザイン料の下降傾向や商業系開発プロジェクトへの参入促進等の課題も多いようである。このような実績を持ちつつも国内での知名度はまだ十全ではないためもあってか、人材の確保には苦労しているようである。

人材確保は、中途採用が多いということである。就業者



写真 .6 復旦大学上海視覚芸術学院でのヒアリング

は、学生からの新卒を含め、企業の将来性や教育体制等を価値判断し、積極的に転職するのが通常であるようだ。グラフィックデザイン系、特に人気があるアニメーション分野の学生はレベルアップしているが、プロダクトデザイン系はそうでないケースも多く、さらに仕事に対する意欲が低下した層もシェアが大きく社会問題とされているそうである。

前訪問先で顕著であったように企業と大学の連携は盛んだと彼らも認識しているが、GK 上海は大学との連携はあまり行っていない。人材的に、インターンシップの学生や新人を教育指導する者が少ないことが一つの要因ということである。これは会社内の教育体制等で流動しやすい中国雇用事情の中では、人材確保・組織安定化に関する課題でもある。

もしも、このような企業事情に対して大学発のデザイン交流を考えるなら、復旦大学上海視覚芸術学院への徐非常勤講師の働きかけを得つつ、本学デザイン実務系教員のインターンシップ指導、産学協同プロジェクトのワークショップ指導等は効果的なのではないかと考えられる。学生も本学からの参加も行えば、今後有望な中国デザイン市場の現場を勉強することもできよう。企業を介した日中大学交流としても位置づけられる。つながりがあるハイアール社とその場を活用した交流も視野に入れることができる。また、本学教員には GK グループ出身者が数名おり、企業事情やノウハウを踏まえた教育指導が可能なのである。

3. まとめ

以上のように、上海市におけるデザイン交流や教育の起点として、3つの異なった現場を調査した。それぞれで工夫されたしくみや施設が認められた。改めてそれらを列挙する。

まず、大学教員を媒介とした中国の実践的教育の事例である。これは、以下のようなしくみと施設になっている。

- ・大学内施設への兼業教員のデザイン事務所の誘致、すなわち、施設の仕様や低コスト化によるインセンティブで、実務と教育の近接と連携を実現する。
- ・そのような事務所隣接の学生作業ルームで学生による実

務を行うことで、実践的教育とする。

- ・教員は、場所的人材的な優位性を持って、教育研究と実務を両立させる。
- ・学生が大学内で身近に実務に接すること、複数でまとまって参加することで大学としての安定した実践的教育となりうる。

このような場に対して、例えば、日本のデザイン事務所が入居し、学生も指導しながら、中国での出発点にするといった日中連携も可能だろう。

次に、大学施設を媒介とした中国の実践的教育の事例である。これは、以下のようなしくみと施設になっている。

- ・大学内にデザイナーのスタジオを用意し、魅力的な客員教員としての場をつくることで、著名なデザイナーによる実践的教育を行う。
- ・大学内に企業と連携した展示・交流スペースを設け、実践的教育のチャンスを増やし、社会へ発信する。
- ・このようなケースでは、デザイナー招聘や連携案件を流動的かつ多様に発生させることが可能となり、フレキシブルな実践的教育となりうる。

既に、日中大学の交流展の提案を受けたように、手持ちのコンテンツを展示交流させるような実現が比較的容易なものから、日中学生同士のワークショップ、さらに企業と連携したプロジェクトに至るまで、様々な実践的教育が可能であり、日中連携がスタートしやすい環境があると考えられる。

最後に、中国現地の企業を媒介とした実践的教育の可能性である。

- ・中国の企業のデザイン現場と日本の教育研究人材が連携することで、企業の人材教育環境を整える。
- ・それによって企業の雇用安定性を高めるとともに、学生のインターンシップの場に展開する。
- ・環境が整ってくれば、日本からの学生のインターンシップも可能になろう。

今回訪問先（GK 上海）では、企業と日本の教育研究人材のマッチングが認められるため、このような発想が可能となった。



写真.7 復旦大学研究室棟廊下の学生作品



写真.8 復旦大学上海視覚芸術学院の交流施設

4. おわりに

製品デザインの分野では、台頭著しい中国企業・市場との連携を視野に入れた教育プログラムは重要な課題の一つである。

日中両国の現状に思いを馳せるとき、経済的な面、製造業的な面における優位性の変遷は歴史の流れでもあるだろう。また、領土という国の境界の面では外交上の摩擦の関係もあろう。しかし、デザインの面については、単純な優劣に目を向けるのではなく、双方の特性や融合性の視点から、共感・融合関係を築くことが重要ではないだろうか。また、そのような場にデザイン学生が参加することで、新しい市場における実践的なデザインの学びが可能になるのではないかと考えられる。

本稿は、平成 23 年度デザイン学部長特別研究「日中連携による実践型の製品デザイン教育展開の可能性」を得て実施した調査報告と提案である。今後のより具体的な提案に向けて、研究を継続する予定である。

ヒアリングの調査結果については、可能な限りバックデータを確認しているが、ヒアリング先からの主観的な情報や確認困難な情報は、妥当と思われる範囲において伝聞調の言い回しで表現した。

参考文献

- 1) 黒田宏治、佐井国夫「中国の大学教育におけるデザイン教育の動向（その 1）」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.9, 2008
- 2) 黒田宏治、佐井国夫「中国・海南省における大学デザイン教育の現状 - 中国の大学教育におけるデザイン教育の動向（その 2）」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.11, 2010
- 3) 黒田宏治、佐井国夫、磯村克郎、迫秀樹、伊坂正人、木下理郎「日中連携型デザインビジネスの生成と展開 - 青島海高設計製造公司（QHG）の設立・運営をめぐって」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.12, 2011
- 4) 上海視覚芸術学院（大学概要案内冊子）
- 5) 復旦大学上海視覚芸術学院「2011 届優秀卒業作品集」, 2011
- 6) 復旦大学上海視覚芸術学院学術委員会「視覚・言説 - 復旦大学上海視覚芸術学院 建校五周年展」, 2010
- 7) 上海工程技術大学公式 HP <http://www.sues.edu.cn>
- 8) 復旦大学上海視覚芸術学院公式 HP <http://www.sues.edu.cn>
- 9) GK グループ公式 HP <http://www.gk-design.co.jp>



写真.9 復旦大学、張少俊（右）除講師（左）と一緒に



写真.10 GK 上海にて（左から、橋本氏、徐氏）

